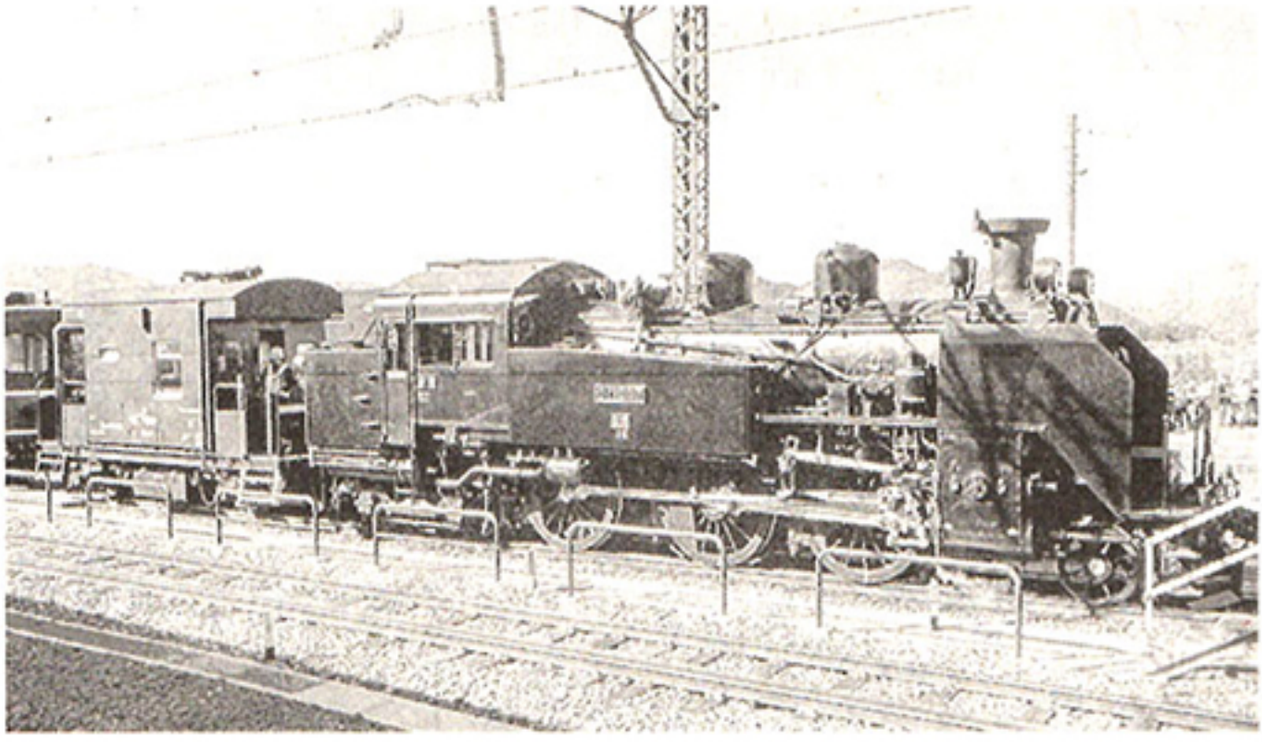

鉄道保存協会が協力した東武鉄道の「SL大樹」＝栃木県の下今市駅

# 鉄道保存協会が横浜に移転

## 「発祥の地でSLを」

鉄道の歴史的な車両や施設を保存する全国の約60団体が集う日本鉄道保存協会が、本部機能を担う事務局をこのほど東京から横浜に移した。鉄道開業150周年を控え、発祥の地・横浜での蒸気機関車（SL）運行も視野に「歴史遺産としての鉄道」を発信する。

事務局は、鉄道遺構の調査経験もある公益社団法人横浜歴史資産調査会（横浜ヘリテイジ、横浜市中区）に併設。調査力に加え、鉄道発祥の地の歴史をアピールする狙いで、今年9月に移転を正式決定した。

保存協会は1991年に発足。ボランティアが主軸となりSLなどを保存運転している英国をモデルにした。SLを保有する大井川鉄道や秩父鉄道、JRをはじめ博物館や資料館、愛好家団体などが参加する。

近年は東武鉄道が栃木県で運行する「SL大樹」のために客車などを調達。北海道の炭鉱で活躍した希少な車両群を保有したり、福井県の廃線にSLを走らせる構想に協力したりと、活動はより深化している。

横浜ヘリテイジの常務理事でもある、同協会の米山淳一事務局長は「横浜ヘリテイジでも鉄道遺産を近代化遺産と捉え、市内の現存例を調査した経験がある」と共通点を説明する。

同協会が見据えるのは、日本初の鉄道が新橋―横浜間に開通して150年となる2022年だ。桜木町駅前から新港地区へ延びるプロムナード「汽車道」に、圧縮空気で動く本物のSLを走らせる夢を描く。

かつて横浜港を巡る貨物列車が走った汽車道には今もレールや枕木が残され、実現性は高いという。横浜赤レンガ倉庫の前には、往年の太平洋航路の船客らが乗り降りした連絡列車のプラットホームもある。

米山事務局長は「鉄道遺産の保存活用を通じて、地域活性化にも貢献できるよう、市民の関心を広げていきたい」と抱負を語った。

（斉藤　大起）

＊「神奈川新聞と戦争」は休みました。